

自尊感情を育成し、学習意欲を高める授業研究 —トピック型 JSL カリキュラム「ようこそ先輩！～夢をもとう・夢をはなそう～」の実践から—

江口 修三（呉市立白岳小学校）

伊藤美智代（ワールド・キッズ・ネットワーク）・小島祥美（東京外国語大学）

1. 子どもの課題と実践の目標

筆頭執筆者は、日本語学級を担当して今年度で3年目となる。この間、母学級での学習に集中できずに自尊感情もすり減ってしまう児童がいた。また、母学級での居心地が悪くなり、学校を休みがちになってしまう児童もいた。そのため、児童らの実態を掴みながら学級担任との連携を図りつつ、母学級での復習型学習や当該児童に応じた文型中心の日本語指導を試みるものの、日本語力の向上になかなか繋がらなかった。そのようななかでも、児童らのルーツに関わることを話題にした授業では、児童らの目の輝きが異なることを感じていた。

そこで、児童らの興味・関心の高いトピックを題材にした学習（トピック型 JSL カリキュラム）を4～6年生の11人に導入した。なお、実施にあたり「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA」を全員に行ったところ、「話す」は、「ステージ1」が1人、「ステージ3」が2人、「ステージ4」が8人であった。また、「読む」は、「ステージ3」が4人、「ステージ4」が6人で、「読む」の実施までに至らなかった児童が1人いた。特に、日常では書くことを嫌う児童も多い。そのため、言語能力だけでなく、地域で学習支援を行う NPO と協働して家庭環境なども包括的に把握しながら、児童らが得意とする「話す」力を土台にして、4～6年生全員であるからこそできる、日本語と母語をフルに使って学び合える活動を考えた。

本実践では、トピックとして本校の日本語学級の先輩（ブラジル出身で小2の時に来日、3×3プロバスケットボールプレイヤー）との出会いの場を用意し、夢の実現に向けて今を考えることを目標とした。そして、児童らの言語能力の向上とエンパワーメントも、本実践では大きなねらいとした。そのため、はじめに「働くこと」をイメージしながら、他者へのインタビューの方法を学んだ後に、先輩との出会いをつくって直接に話を聞く「体験」を通して、児童自身がなりたいたい将来の夢とはどんなもの（仕事）なのかを「探求」し、各自の夢の実現のために何ができるかを考え、まとめたことを友達や先輩に「発信」する、という9時間授業を設定した。

2. 具体的な実践とその過程

2.1 体験・前半「働くことをイメージしよう」（2時間）

児童らが「働くこと」をイメージできる活動として、授業実践者自身のライフヒストリーを例に取り上げた。授業では、特に10歳から教師になるまでのことを児童にイメージしやすくするために写真などを貼ったライフヒストリー（年表）を用意し、「なぜ小学校の先生になったのか、いつ頃それを決めたのか、そのためにどんなことをしたのか、今の仕事のやりがいについて」等のキーワードを示しながら話をした。その後で、「一番心の残ったところはどこですか。」と発問し、感じたことやわかったことを表現（AUカード）するようにした。最後に、授業実践者に聞きたいことを児童自身で考えて、他者へのインタビュー方法を学習できる場もつくった。

2.2 体験・後半「先輩の話を知ろう」（2時間）

先輩と連携して作成した写真入りライフヒストリーを提示しながら先輩を紹介し、この先輩が来校することを伝えた。そのうえで、児童自身で先輩に聞きたいことを考える活動を行った。

11人中7人はバスケットボールやサッカーの教室に通う児童であるため、プロのスポーツプレイヤーの来校に幾分興奮気味であった。特に4年のA児（勉強嫌いで学習では集中力が続かないが、サッカーは大好き）は、先輩が来ることに興味がある反面、自己主張が強く対抗意識を全面に表していた。一方で6年のB児は、そうした他の児童の様子を淡々と眺めていた。

いよいよ「ようこそ先輩」の授業時では、試合中の怪我で先輩が突如来校できなくなり、急遽オンラインでの授業に切り替えることとなった。児童には授業の開始までそのことを伝えず、代わりに身長193cmの等身大の先輩の姿を掲示することで、臨場感溢れる授業になるように工夫した。そして、これまでの学習を復習した後に、オンラインで先輩に登場いただいた。そこでは、「なぜプロのプレイヤーになったのか、いつ頃プロになろうと決めたのか、そのためにどんなことをしたのか、今の仕事のやりがい」を先輩に語っていただいた後、児童に「一番心に残ったことは何か」と問い、先輩が話したキーワードを書きだした板書に、自分のネームプレートを貼った。その後、児童は3-4人のグループになり、自分がネームプレートを貼ったところとその理由を表現（AUカード）し合いながら、先輩へのインタビュー内容をグループで考えた。

インタビューでは、すべての児童が先輩に質問ができた。そのなかで、B児だけがポルトガル語（母語）で質問した。言葉の壁もあって母学級では友達関係で悩みを抱えるB児は、将来やりたいことを普段では見せたことのないほどの積極的な勢いでポルトガル語を話し出し、先輩に質問を投げかけた。それに対して「ちょっとずつでいいから、できることをやろう」というポルトガル語での先輩のアドバイスをB児は満面の笑顔で聞いて頷き、先輩の言葉をメモしていた。

2.3 探求「将来やりたい仕事（夢）について調べよう」（2時間）

先輩の話の踏まえて、自分が将来の夢や、やりたい仕事について調べる活動を行った。そのなかでA児は、タブレットを使ってプロのサッカーとバスケットの年収の違いを調べ、サッカーの方が年棒がいいことを発見し、自慢する場面もあった。B児は、黙々と取り組んでいた。

2.4 発信「将来の夢を友達に発表しよう」（3時間）

将来の夢の実現をイメージするため、「20年後の自分へ」と題した自分宛の手紙を書く活動を行った。日本語で文を書くことに苦手意識が強い児童らであるため、まずは一人一人が書きたいことを話すことから始めたところ、すべての児童がこれまで書いたことのないほどの質の高い文章を書いた。A児は、大きく夢をふくらませ自分がサッカー選手として大活躍している姿をイメージし、サッカーの練習だけでなく勉強も頑張ることなどを書いた。また、B児はポルトガル語の翻訳機能のあるタブレットを使いながら、将来の夢の実現に向けた考えを日本語でまとめた。

そして、先輩にその想いを直接伝えようと、学級に先輩を招いた授業を行った。児童は一人ずつ自分宛の手紙を読んで先輩から個別にメッセージをもらい、という授業構成で取り組んだところ、A児もB児も「将来の自分をイメージすること。夢はかわってもいい。失敗をしてもいい。大切なことは経験すること。それが次に役立つ。」という先輩の言葉に、強く反応していた。

3. 考察

本実践の最大の成果は、日本語に自信のない児童までも想いや考えを他者に伝えたり、人前で発表したりすることができたことだ。それによって、児童らの日本語で書く文の質と量にも大きな変化をもたらした。何よりも、夢の実現に向けて今やるべきことを具体的に考えて書いた児童が多かったことに、驚いた。そして、A児とB児については日常で前向きな行動が見られるようになり、先輩の実体験に基づくメッセージの力強さとエンパワーメントの重要性も再確認できた。

また、本実践から、異学年であるからこそ実践できる有益な授業方法も、発見した。